

動脈と同一の基本形が維持されている。中大脳動脈は、内頸動脈（第一鯉弓動脈）、すなわち最前端の体節性神経管動脈の後枝に当っており、これが脳の発達によつて異常な生長を強いられたものである。

3. 高血圧症患者の歯科・口腔外科的処置の影響およびその可能性に関する研究

（口腔外科）扇内 秀樹

演者らの教室では、心疾患患者の歯科口腔外科的処置の影響およびその可能性に関して、多目的用途記録監視装置、最高血圧連続記録装置の導入により、より多角的な病態像の把握に成功し、すでに報告しているが、同様の方法にて高血圧患者の歯科口腔外科的処置について、全身疾患を有しない患者と比較し、指尖脈波、血圧、脈拍数、GSRについて検討しているが、今回、指尖脈波について検討を加え若干の知見を得たので報告した。

4. 第1肋骨に発生した Ewing 腫瘍と思われる1例（整形外科）

○蓮見 和美・上田 礼子・並木 脩・
（外科）織畑 秀夫・鈴木 忠・
中野 達也・中川 隆雄
（中検病理）平山 章・玉置 憲一

骨腫瘍は臨床的、組織学的に複雑な様相を呈する。特に Ewing 肉腫はまだ多くの問題点が残されている。Ewing 肉腫は通常、長管状骨骨幹部に好発するが、他の骨からの発生も報告されている。演者らは、今回、左鎖骨上窩の腫瘍を主訴として、当科を受診した19才の女性で、X線像にて左第1肋骨の骨破壊像を示した腫瘍を経験した。病理組織学的には、Ewing 肉腫の確診が得られず、神経芽細胞腫、神経原性肉腫、横紋筋肉腫、細胞肉腫などと鑑別困難な円形細胞肉腫であった。臨床的にも Ewing 肉腫に特徴的といわれる炎症所見もみられなかった。また、骨原発性か否かにも問題があり、これらにつき検討を加えて報告した。

5. 高度な歯周疾患（いわゆる歯槽膿漏症）罹患歯に再植術を応用する試み

（第二病院歯科）

○劉 茂雄・山村 彰一・
永田 広次・河西 一秀

歯周疾患罹患歯の末路は抜歯と考えられているが、われわれは、このような歯牙に再植術を応用して保存を試みている。

一般的に歯牙の再植術は、外傷により脱落した歯牙、誤抜した歯牙、あるいは根端病巣のある歯牙を故意に抜歯し根端病巣を処理したものなど、いずれも抜歯箇の適

合のよいものについて行なうのが常識とされているが、われわれは既成の概念にとらわれずに、歯周疾患罹患歯で抜歯を必要とする歯牙に再植術を試みた。

ここに報告する2例の再植歯は、抜歯後歯髄を除去、根管充填剤（カルピタル）で根管充填を行ない、超音波歯石除去器で歯石除去を行なった。抜歯窩は、1例はそのまま、他の1例は顎骨を穿骨して植立した。術後は特に口腔清掃の指導と監視を十分に行なっている。最初の1例は術後すでに3年9カ月を経過しているが、骨植も極めて良好で現在に至っている。

いまだ例数も少なく、運命についてふれることはできないが、追つて症例を加え経過を報告したい。

6. 胆石症の臨床的検討

（消化器病センター）

○矢崎 浩・浜野 恭一・御子柴幸雄・
高田 忠敬・高崎 健・宮内倉之助・
草野 佐・平島 勇・羽生富士夫

近年、胆石症手術も、手術手技、術前術中検査、化学療法等の進歩により、手術成績にも著しい向上が見られるが、今なお結石の遺残、再発等、再手術のやむなきに至る症例が存する。今回、われわれは、これらの手術成績の向上を考え検討を加えた。

当センターにおける昭和42年12月より昭和46年12月まで過去4年間の胆石手術症例は377例であり、胆嚢結石300例、胆嚢胆管結石58例、再手術症例19例であった。

これらの結石を赤外線分光分析および肉眼的分析にてコレステリン系石、黒色石、ビリルビン石灰石に分類、または胆嚢胆管周囲の炎症状態を手術所見にて、胆嚢型、胆嚢周囲炎型、胆管炎型、胆嚢胆管炎型の四型に分類し、この炎症状態と結石の種類、および総胆管像に検討を加えた。その結果、初回手術時、胆管の炎症を有する胆管炎型および胆嚢胆管炎型に属する石灰石を有する症例は、再発の可能性を多分に含んでいると考えられた。またコレステリン系石でも、胆管の炎症を有するものでは、再発の可能性があると考えられる。したがって胆管の炎症を有する症例では、胆管に何らかの処置をする必要があると考えられる。

7. 〔症例検討会〕横隔膜ヘルニアについて

司会 梶原 哲郎講師

追つて全文を本誌に掲載する。

8. 〔綜説〕職業性膀胱がんに関する研究

（第二衛生）石津 澄子

各種の染料色素を合成する過程で使用される芳香族アミン化合物の中には、膀胱、腎盂、尿管など尿路系臓器